イギリス近代における植物表象
―植物学と出版文化の発展において―

石倉和佳

はじめに

植物表象がイギリスにおける文字文化の中に浸透する契機となったのは、植物学と園芸の発展である。人々が読み、楽しむ文章の中に植物が語られるとき、その語りはあるときは植物の生に神の摂理を垣間見ようとする営為の中から生み出されたものであり、もしくは庭園の草花と日々対話している庭師の知恵から紡ぎだされるものであった。文学作品としての形式をもった言葉の中に、植物学や園芸から生み出された言葉が自然と交じり合うようになるには、長い時間がかかった。人々の言い伝えや知恵とともに理解されるものとして、もしくは聖書的な象徴的意味を帯びて、もしくは日常的に目にする草や花や実を指すものとして、多くの植物が文学作品に現れるようになる[1]。しかし長い間、自然に神の英知を見る聖職者の言葉は、多くはラテン語で書かれた学術書のなかにひそかにしまわれ、庭師たちの仕事は言葉にされることなく彼らの日常的な仕事の中で繰り返されるだけだったのである。そして草木全体を一つの世界と見る博物学的視点が、植物学と園芸とが相互に影響しあい、発展するところに生み出された。イギリス文学の表現の中に、植物学と園芸との発展からの影響が見られるようになるのは、18世紀後半からと見てよいが、これはイギリスにおけるリンネ植物学の受容と同時期となる。

以上をふまえて最初に、イギリス17世紀の植物学を概観したい。次に18世紀植物学の発展について、フランスのトゥルヌフォール（Joseph Pitton de Tournefort, 1656-1708）の植物分類のイギリスでの受容、およびカール・リンネ(Carl Linnaeus, or Carl von Linnè, 1707-1778) の博物学についてその時代背景から考察する。そして、18世紀の園芸文化を支えたフィリップ・ミラー（Philip Miller, 1691-1771）の『園芸辞典』(*The Gardener's Dictionary*) を取り巻く事象について見ていきたい。これらの考察は植物学および園芸の発展史をあとづけることになるだろう。イギリス18世紀後半のリンネ植物学全盛期を作り上げたのは、ジョセフ・バンクス(Joseph Banks, Sir, 1743-1820) と彼を中心とした植物学ネットワークであった。本稿では、バンクスが王立協会会長として、リンネ植物学を通した学術ヘゲモニー形成を企図したことに見られるような、当時の植物研究にまとわりつく政治性について検討を加えたい。そしてリンネ分類学が植物研究の権威となり、植物学の大衆化を導き出す中で、分類学上の論争や、無批判なリンネ受容が促進されたこと、そしてそのような時代思潮の中から、イギリス独自の文化現象が生み出された点について考察する。

1．17世紀イギリスの植物学

植物を語る語りがイギリスで文字となって残されるようになるのは、まずは大陸の博物学、植物誌、本草学、園芸書などの影響による。英語で書かれた最も初期の植物書であるジョン・ジェラルド(John Gerard, c.1545-1612)による『植物誌、もしくは植物の一般的記述』(*Herball, or Generall Historie of Plantes*, 1597) が、レンベルト・ドドエンス（Rembert Dodoens, 1517-1585）の著作に多く準拠したものであることもその一例である。チャールズ一世の植物学者となったジョン・パーキンソン(John Parkinson, 1567-1650) は、美しい木版の図版を多く掲載した園芸書、『地上の楽園』(*Paradici in sole paradisus terrestris, or A Garden of All Sorts of Pleasant Flowers*, 1629) を上梓した。1000 種類以上の植物について記載されたこの本は、イギリスで出版された園芸書として特筆すべきものであるが、ヨーロッパ原産の草花の図は、当時としてはむしろエキゾティズムを刺激するものであっただろう。パーキンソンのもう一つの重要な著作、『テアトルム・ボタニクム』(*Theatrum Botanicum,* 1640) は、スイスの植物学者キャスパール・ボアン(Caspar Bauhin, 1560-1624) の『植物対照図表』（*Pinax theatri botanici,* 1623）に準拠したものと言われている。

これらはイギリスにおける植物書の代表的なものであるが、当時これらの書籍を手にすることができるのは限られた人々であった。とはいえ、パーキンソンの書籍にある木版図の花々が、イギリスに咲き乱れる花ではなかったとしても、それらは本の頁から現れる強烈な実在感を持った形象として愛でられたはずである。植物の形象をまず視覚的にとらえ、目を楽しませる様々な形として提示することにおいて、イギリスではパーキンソンがまず一つの達成を見せている。時代が下って細密な手彩色の実物をそっくり写した植物画が多く描かれるようになると、木版の図版は稀なものとなっていたが、美術的な価値から見ても、パーキンソンの植物木版画は群を抜いているといってよい。

Paradici in sole paradisus terrestris, p.75 Narcissusの一群（水仙）

イギリスの植物に関する学問が、独自の展開を見せたのは、ヨーロッパにおける植物の分類学の基礎を作った一人である、ジョン・レイ(John Ray, 1627-1705) の著作によってである。彼は自然神学者であり、ケンブリッジ大のフェローとして過ごした期間に、ケンブリッジ州の草花を採集し、そこで庭を作り、その後教え子らと共にイギリス全土を旅して植物観察を続けた[2]。レイのイギリス全土の調査による植物探索の成果は、『イギリス植物概要』(*Synopsis Methodica Stirpum Britannicarum*, 1690; 3rd ed. Ed. Johann Jacob Dillenius、1724) にまとめられた。それは後にドイツの植物学者であるディレニウスによって改訂され、トゥヌルフォールの『植物学の基礎』(*Éléments de botanique ou méthode pour connaître*

les plantes, 1694) とともに、時代を代表する植物書となる。リンネ分類学が登場したあとの18世紀終盤になると、レイの『イギリス植物概要』はあまり利用されなくなったようであるが、現代でもイギリスの植生を知るに重要な本である。レイの広汎な植物採集により記録された植物の中で、今はイギリスから消滅したものも少なくないからである。18世紀の間に、イギリスでは全国的なエンクロージャーの波が押し寄せた。土地改良とともに、コモンズが消滅し、そうした土地に暮らす人々と共に、環境の変化に伴って野の草花の中には姿を消すものがあった。レイの著作は歴史的な植物学の記念碑であると同時に、ひっそりと姿を消して言った草花の記録としても意義のあるものとなっている[3]。

レイの植物研究の集大成として出版された『植物史』(*Historia Plantarum*, 3vols., 1686-1704)は、最初に出た二冊の中に6100種類の植物が、三冊目も入れると一万以上の植物が取り上げられていた。彼の植物研究は信仰に根ざしたものである。彼は神学書も書いているが、長く読まれたものの一つに『被造物に示された神の英知』(*The Wisdom of God Manifested in the Works of the Creation,* 1691) がある。ここでは、神が創造した世界は現在までその本質を同じくして継続したものと考えられており、彼の自然観察は、科学的行為である以上に、現前の自然の命の営みに神の作りだした調和ある世界を見ることへの希求に基づいたものであることを示している。レイの『神の英知』は、イギリスにおける自然神学の重要な一つの水脈となり、18世紀には、ウィリアム・ペイリー(William Paley, 1743-1805) 等に大きな影響を与えることになる。

自然に忠実で正確な観察の重要性を常に唱えていたレイは、観察に基づいた研究を重ね、「種」の概念に基づく分類体系を作り上げた。レイの時代以降、植物学は分類体系の精錬に向かうことになる。17世紀に到るまで、英語で書かれた植物書はわずかなものであり、17世紀までの植物学はディレッタントのたしなみ程度に捉えられていた。レイがケンブリッジ大学で植物学を学ぼうと思ったときに、一人の教師も見つけることが出来なかったことにもそのことは示されている[4]。この時代までは、植物に関する文芸上の表現は、神話や歴史、紀行文や博物誌といった文字を通じての情報に基づくものか、体系付けられていない経験的な知に拠ったものであるしかなかったといえるだろう。

2. 18世紀の植物学

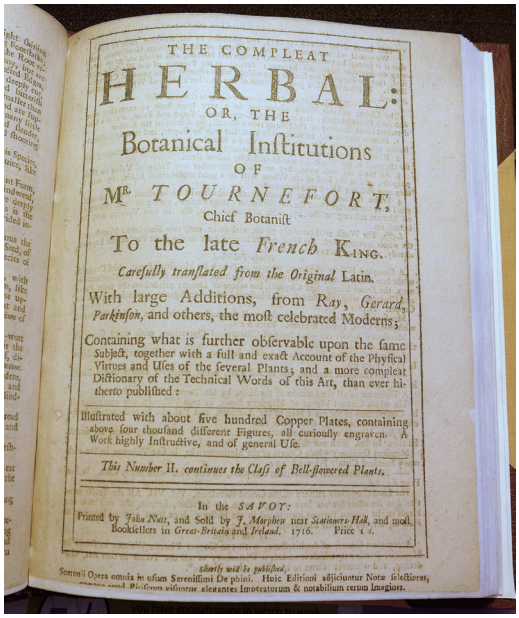
1694年、フランスのトゥルヌフォール（Joseph Pitton de Tournefort, 1656-1708）は『植物学の基礎』を出版し、花の形によって植物を分類する分類法を確立した。トゥルヌフォールの分類は、人為分類の中に含まれるが、種のまとまりを示す「属」(genus)の概念を提示したことで知られている。トゥルヌフォールによる分類法が発表されたころ、オックスフォードにいたロバート・モリソン(Robert Morison, 1620-1683) は、植物の実や種の特徴に分類の基礎を置く分類法を編み出していた。彼はスコットランドで生まれ、王党派であったため清教徒革命期にはフランスに亡命し研究を続け、ブロア(Blois)の王立庭園の園長として仕事をした。1660年のチャールズ二世の王政復古と共にイギリスに戻り、王医となりしばらくロンドンにいたが、1669年にオックスフォード大学の教授として迎えられそこで植物研究を続けた。モリソンは現在では近代的植物分類学の先駆者の一人と言われているが、彼の分類法をその後発展させる人はほとんどいなかった[5]。

チャールズ二世がフランスに亡命し、その後戻ってきたように、王党派の人々の中にはモリソンのようにフランスに滞在する者もいた。その後、1685年にナントの勅令が廃止されると、多くのユグノーの人々が移り住んできた。17世紀前半から18世紀初頭にかけて、政治的な安定がもたらされるまで、フランスやヨーロッパ各地からの人の移入が多かったことに加えて、絶対王政を敷いたルイ14世統治下のフランスでは出版が出来ないもの

もイギリスでまず出版されるなど、政治的状況と結びついた文化交流があった。また、フランス語圏からの移入者の増加はフランス語の文献を英語にすることを加速する要因ともなった。1717年に出版されたトゥルヌフォールの『レバントへの旅行記』(*Relation d'un Voyage du Levant*)は、翌年には英語版が出ている。

18世紀前半のイギリスにおいては、ジョン・レイに加えてフランスの新しい植物分類学としてトゥルヌフォールの分類法が受容された。博物学に早くから関心を示し、ジョン・レイとも交流したハンス・スローン(Hans Sloane, Sir, 1660-1753)は、パリに留学し王立植物園で研究していた際、 指導教員の一人がトゥルヌフォールであり、植物学上の影響を多く受けた。スローンはその後膨大な博物学のコレクションを集成し、それらは大英博物館の収蔵品の基礎となった。彼がアイザック・ニュートン(Isaac Newton, Sir, 1642-1727) の死後、王立協会会長になる経緯の中で、博物学の研究の中心はスローンの周辺に集約され、トゥルヌフォールの植物学はイギリスにおける植物分類のスタンダードとして認知されていく。ミラーが『園芸辞典』を編集するにあたって、採用した分類法はトゥルヌフォールのものであり、それは第七版に至るまで変更されることはなかった。

イギリスでは、1716年からトゥルヌフォールの植物書の翻訳、『植物全書』(*The Compleat Herbal, or the Botanical Institutions of Mr Tounrefort*, 1716-1730) が出版された。製作したのは、イギリスにおけるトゥルヌフォール信奉者の一人、ジョン・マーティン(John Martyn, 1699-1768) である。しかし、もともとトゥルヌフォールの翻訳を始めたのは、パトリック・ブレア(Patrick Blair, c1680-1728) であると言われている。ブレアはモリソンの分類学を支持していたが、より洗練されたトゥルヌフォールの分類に関心が移ったようである[6]。彼は王立協会会員で、スローンの知己でもあった。医者であり植物学にも精通しており、1720年には『植物学随想』(*Botanick Essays*)を出版している。


THE COMPLEAT
HERBAL:
OR, THE
Botanical Institutions
OF
Mr. TOURNEFORT,
Chief Botanist
To the late French King.
Carefully translated from the Original Latin.
With large Additions, from Ray, Gerard, Parkinson, and others, the most celebrated Moderns;
Containing what is further observable upon the same Subject, together with a full and exact Account of the Physical Virtues and Uses of the several Plants; and a more compleat Dictionary of the Technical Words of this Art, than ever hitherto published:
Illustrated with about five hundred Copper Plates, containing above four thousand different Figures, all curiously engraven. A Work highly Instructive, and of general Use.
This Number II. continues the Class of Bell-flowered Plants.
In the SAVOY:
Printed by John Nutt, and Sold by J. Murphen near Stationers-Hall, and most Booksellers in Great-Britain and Ireland. 1716. Price 1 s.

The Compleat Herbal: or, the Botanical Institutions of Mr. Tournefort. の表紙　British Library 所蔵　著者撮影

このように見てくると、18世紀の前半までは、19世紀には想像できないほどイギリスの学術文化の中にフランスの影響が色濃く見られる。これは人の交流による一種の文化混交ともいえる時代であったためもあるが、植物が国家の利益の為に重要な資源であるという明確な意識が、国家を越えて共有され、それがために反発しあうことが一般的でなかったこともあるだろう。科学が普遍的な価値であると考えるのは必ずしも実態に合わないこともある。特に植物学のように分類法や研究法に様々な種類があり、各地によって気候や生育条件が違い、統一した原理を求めることが難しい学問の場合、どの分類法を採用するかについては科学的な優位性の主張だけでは割り切れないものがあった。フランスの植物学が権威となることに、イギリスの利害が抵触しない間は問題がなかったとしても、18世紀半ばからの相次ぐ植民地争奪戦争により両国の利害が対立し始めると、イギリスにおいてフランスの植物学を採用することには、時に微妙な屈折が生まれる状況もあったと考えられる。フランスとの植民地争奪戦において新しく奪取した土

地の植物資源情報を、敵国のものではない、いわば第三者から出た学術的な権威とともに得ることがより望ましいと感じられたとしても不思議ではない。イギリスがフランスとの領土争奪戦に競り勝ち始めた18世紀中盤、イギリスの植物学者の中に支持者が生まれ始めたのがリンネ植物学であった。

18世紀前半には、リンネ植物学を歓迎する空気はイギリスには殆どなかった。カール・リンネ自身は、『自然の体系』(*Systema Naturae,* 1st ed. 1735) の初版が出た直後の1737年夏に、イギリスを訪れている。その際はチェルシーにいるスローンを訪問したが、概してリンネや彼の博物学、分類方法への反応ははかばかしくないものであった。但しこの訪問の際に知り合った人々の中には、その後も長く通信を続ける者もいた。そのうちの一人で重要な人物がピーター・コリンソン(Peter Collinson, 1694-1768)である。コリンソンはクエーカーの輸出入業者で、アメリカとの商取引を手広く行っていた。彼自身植物学を修め、王立協会の会員であり、スローンとは友人であった。コリンソンは、アメリカの植物学者ジョン・バートラム(John Bartram, 1699-1777)から多くのアメリカの植物（特に木々）を輸入し、イギリスに移植したことで知られる。

リンネ植物学は、『植物の種』(*Species Plantarum*,1st ed., 1753)と『植物の属』(*Genera Plantarum*, 5th ed., 1754) が出版された時に、その完成を見たと言える。リンネは1741年からスウェーデンのウプサラ大学(University of Uppsala) の植物学教授であり、大学付属の植物園を運営し、多くの学生に教授した。彼はスウェーデンを始め、近隣諸国の植物探査に精力的に出かけた。こうしたフィールドワークは、国家の要請による植物資源の調査としても行われた[7]。そして、換金できる植物資源を自国内に移入することを目指して、植物情報や標本を各地から持ち帰るために、世界中に所謂「リンネの使徒達」(the Apostles of Linnaeus)を派遣したのである。大北方戦争（Great Northern War, 1700-1721）で国土の多くを失ったスウェーデンは、リンネの時代には国家再生の途上にあった。リンネの博物学の学術的な重要性もさることながら、世界中への植物探索の活動は重商主義的経済を追求するものであることが指摘されている[8]。このことは当時の時代背景を色濃く反映していると言えるだろう。

植物探索に出かけたリンネの弟子たちの中には、英米へと向かう者たちもいた。イギリスとの関係で特に重要なのは、ペール・カルム(Pehr Kalm, 1715-1779)とダニエル・ソランダー(Daniel Solander, 1733-1782)である。カルムはリンネの最初の弟子の一人で、スウェーデン王立アカデミーの要請で北アメリカの有用植物の調査に出た。その途中、イギリスに立ち寄り多くの植物学者と交流している。1748年のこのイギリス訪問では、カルムは紀行文を残しており、それは後に英語に翻訳され紹介された。ソランダーはリンネの紹介で、1760年にイギリスを訪れた。リンネはコリンソンや、商人であり博物学者でもあったジョン・エリス（John Ellis, 1710-1776）にソランダーを紹介する書簡を送っている[9]。イギリスに来たソランダーは、すぐに英語を覚え、博物学好きの人々との交際を始めた。リンネからペテルスブルグの大学の教授ポストを打診されたときには、コリンソンに説得されてイギリスに留まった。そのときのジョン・エリスのリンネ宛の手紙には次のようにある。

ソランダーを知る人たちは、彼が得意だと思われる仕事を何か与えようと考えており、それがうまく行くことを願っています。ソランダーは大変落ち着いた人で、振る舞いもよく、そして大変熱心で、どんな意味でもお金を無駄に使うようなことがありません。だから彼はうまくやるだろうと私は思っています。彼は人に知られれば知られるほど、人に好かれる、ということは確かにいえる事です。

His [Solander’s] friends are considering of getting him employed in something that may be for his advantage,

and they are in hopes of succeeding. He is exceedingly sober, well behaved, and very diligent, no way expensive; so that I hope he will do very well. I can assure you, the more he is known, the more he is liked . . . (Smith (ed.), *A Selection of the Correspondence of Linnaeus,* Vol.1, 160)

このすぐ後に、ソランダーは大英博物館の館員として雇われることになった。その後、ウプサラ大学（University of Uppsala）の教授職をリンネから打診されたが、彼は断りイギリスに滞在し続けることになった。ソランダーとリンネとの交信は、この時に終っている。その後、バンクスと出会い、エンデヴァー号の世界一周の旅に同行し、バンクスの秘書兼司書となったことは良く知られていることである。

以上、18世紀の植物学の変遷を、著作やイギリスでの受容に関して重要な人々を中心に見てきた。1731年から1768年まで出版された、フィリップ・ミラーの『園芸辞典』を理解するには、ここまで見てきた植物学上の背景を理解しておく必要がある。それでは次には、フィリップ・ミラーについて、具体的に見て行きたい。

3. フィリップ・ミラーと『園芸辞典』

フィリップ・ミラーの父はスコットランドの人であったと言われているが、ミラー自身が何処で生まれたのかについては良く分かっていない[10]。彼の父はケントにある庭園で庭師として働いた後、ロンドンのテムズ川下流の南部に位置するデトフォード(Deptford)で農園を経営していた。ミラー自身は園芸家としての訓練を受けた後花の栽培をする業者としてロンドン近郊で働いていた。チェルシー薬草園は、ロンドンの薬剤師協会(Worshipful Society of Apothecaries of London)が薬草の学習のために1673年から開いているものであったが、土地の賃料が高いこともあり、維持をするのが難しい状態が続いていた。1712年、チェルシー一帯の所有者となったのはスローンであった。彼はジャマイカの農園から多くの利益を上げていたのである。薬剤師協会はスローンと交渉し、薬草園の土地を借り受ける契約を結んだ。契約は非常に好意的なもので、薬草の研究をし続けていることを条件に、年間5ポンドで薬草園の土地を貸すというものであった。そして、園で生育した植物の標本を、毎年50、合計2000になるまで王立協会に送る、ということも決められた。

この時、ミラーをチェルシーの薬草園の庭師としてスローンに推薦したのは、前述したパトリック・ブレアである。ブレアはミラーを「同じ職業をしている者の誰よりも、好奇心と才能で前に進む」人材と述べている[11]。スローンはミラーを薬剤師協会に推薦し、1722年、ミラーはチェルシー薬草園の庭師(Gardiner) となった。それから48年間、彼はここで仕事をすることになる[12]。ミラーはチェルシーに来て直後から、『園芸草花辞典』(*The Gardener's and Florist's Dictionary,* 1724)、『園芸暦』(*The Gardener's Kalendar*) と、園芸辞典類を次々発行した。1727年スローンが王立協会会長となった後は、1728年に王立協会誌『フィロソフィカル・トランザクション』にココナツのイギリスでの育て方についての投稿をし、翌年には王立協会会員となっている。1731年には同誌にチューリップなどの球根の水栽培についての報告をしている[13]。当時のミラーは、スローンの肝いりもあって、多くの人からの支持をうけ、順調にキャリアを伸ばしていた。

ミラーは第一に園芸家であり、分類学者でも博物学者でもなかった。彼の出版物には、草花がいかに人間に利用できるか、どのように育てるのがよいのか、うまく生育させるには何に気をつけないといけないのか、などの具体的なノウハウが多く記載されている。ミラーの出版物が支持された理由の一つとして、要を得て簡潔なそうした園芸上の指示が掲載されていたことである。『園芸草花辞典』は、園芸用語の説明から、庭の使い方、接木の仕方などから、各種フルーツや園

芸用の花の説明まで様々な園芸に関する情報が掲載されている。プラム(plum)の項を見ると、59種類のプラムが列挙され、壁に這わせたらよいもの、水が多すぎないほうがいいこと、種有り、種無しなど、種類によっての違いなどが細かく書き込まれている。フランスの園芸書の情報や、各地の園芸家の意見も紹介されている。

ミラーの出版物に見られる園芸に関する態度は、彼の知る情報を広く一般に知らせるというものであった。これは啓蒙主義的な態度であり、実験や研究の成果を『フィロソフィカル・トランザクションズ』に発表している王立協会での活動とも相通ずるものである。19世紀にミラーの伝記を残したジョン・ロジャース(John Rogers) によると、ミラーがチェルシーに来たころ園芸家の仲間たちと定期的に集まり、園芸上の様々な知識や見聞について報告する会があったということである。ミラーがそこで報告された内容を出版しようとしたとき、強い反対に会い、その為会は分裂して突然終ってしまったそうである[14]。当時、ミラーが交流していた庭師たちの多くが、領主の庭園の管理者として、もしくは園芸業者として仕事をしていた。自分が得た情報を他に知られることは自らの不利益となる、という気持ちを抱くものも多かったと思われる。ミラーの『園芸草花辞典』には、「この本に賛同し推奨する」庭師たちの名前が挙げられている[15]。「この本に賛同」というのは、園芸の情報を印刷物として広く公開することに賛同する、という意味である。園芸知識の啓蒙を推進す立場を、ミラーは代表していたということになる。

ミラーの『園芸辞典』などの園芸書の出版を理解するためには、当時の農園や庭園の運営の実際について理解する必要がある。18世紀前半のイギリスではまだ産業革命が進行しておらず、食料や資材の調達は近隣の農園や菜園などから行うのが普通であった。大きな屋敷には必ずキッチン・ガーデンがあり、そこで屋敷の人々や所領内の人々の食料を生産していた。現在は殆ど消滅してしまった、農園と共にある都市の暮らしが、ミラーの時代には通常であった。シティからテムズ川を上流に行った北岸にあるチェルシー地区は、現在ではショッピング街を含む高級住宅地であるが、当時はロンドン中心部の人々の食料や資材をまかなう農園や果樹園、園芸店、樹木店などが多く存在する地域であった。次にあげるのは、1748年5月に、イギリス滞在中のペール・カルムが記録したチェルシーの光景である。カルムの紀行文はイギリスの地方経済を観察することを一つの目的としており、チェルシー界隈の経済について知ることができる。

チェルシー界隈のどちらを見渡しても、果樹園、野菜農園、そしてそれらの間にまばらに散らばる美しい家々、それら以外のものを見ることはない。果樹園はリンゴ、なし、すもも、チェリーなどのあらゆる果樹でいっぱいであり、それらの木々は今花の真っ盛りである。私はこの場所のあらゆるところで、あらゆる種類の小さな木々が売られるために植えられている、「木々の養成所」しか見当たらない広い草地を見た。ここには多くの庭師たちがいる。彼らはこれらの「木々の養成所」によって生計を立てているのだが、ここでそれらはナーサリー（育種場）と呼ばれている。

On all sides round about *Chelsea* there is scarcely seen anything else than either orchards or vegetable market-gardens, and beautiful houses as it were scattered amongst them. The Orchards, [tree gardens], were full of all kinds of fruit trees, such as apple, pear, plum, cherry-trees, &c., which were now nearly all at their best in full flower. I saw here in many places large fields which were nothing but [tree schools], all planted full of all kinds of small trees for sale. There were here many gardeners… whose only means of living consisted entirely of these “tree schools,” or as they are here called *nurseries*. (Kalm, 90)

チェルシーは町に似ており、教会や、美しい通りや、しっかりした様子の良い煉瓦造りの三、四階建ての家々が建っている。ここに住む人々の中には、何によって生計を立てているのかちょっと分からない人々もいる。紳士用装身具を扱っている店があるが、それだけではない。酒場の主人達、宿屋の経営者、コーヒー・ハウスの営業者、醸造家、パン屋、肉屋、などの人々はここではちょっとした良い暮らしができる。というのも、天気のいい日には気持のよい船で、夏の間大勢の人々がロンドンから楽しみにやって来るからである。その時商人たちは彼らの売り物をどんなふうに商えばよいかを良く分かっている。他の人々の主たる稼ぎは、家々や間貸しによるものであるらしい。紳士方に部屋を貸すのだ。彼らは夏の間、何度でも、特に土曜、日曜、そして月曜の半日でも、ロンドンからここにきて留まり、新鮮な空気を吸うのである。

The place [Chelsea] resembles a town, has a church, beautiful streets, well-built and handsome houses all of brick, three or four stories high. I cannot "just" understand what some of those who dwell here live upon. Some have small haber-dashers shops, but that is not saying much. Publicans, innkeepers, coffee-house keepers, brewers, bakers, butchers, and such like, can here make a good living; because a multitude of people from London in fine weather, [in a delightful sail] in the summer come out here, to enjoy themselves, when such people well know how to charge for what they sell. The principal livelihood of the others seem to be from houses and rooms, which they let to gentlemen, who in summer now and again, especially on Saturdays, Sundays, and part of Monday, come out here from London to stay, and take the fresh air. (Kalm, 97)

カルムの観察の目は、チェルシーの商いの営みがどのように回っているのかについて注がれている。ここでの生産物は草木、農産物等であり、園芸技術を持つ人々が、木々を育て売っている。カルムの報告によれば、ここに来れば予算に応じて好きな大きさの木を買って庭を作れるということである。ロンドン近郊の土地所有者達が、自分たちの地所を緑でいろどり、花壇を作ろうとするのであれば、ここに来ればよいのである。そして、食料や果実を生産しているのであるから、宿屋や飲み屋の仕入れもここで出来るのであって、ロンドン（ウェストミンスター以東の地域かと考えられる）からテムズ川の船に乗ってやってくる人々をもてなすことが出来る。貸家や宿屋の商売にも言及があるが、スローンの持ち物がほとんどのようで、彼が不動産でも稼いでいることが分かる。

トゥルヌフォールの翻訳である、『植物全書』(*The Compleat Herbal*) を制作したジョン・マーティンの息子、トマス・マーティン(Thomas Martyn, 1735-1825)は、幼い頃チェルシーで過ごした。彼の晩年の回想に、1740年代のミラーの姿を思い起させるものがある。ミラーは、少年だったトマスに、「おいしいサラダ、カンタロープ・メロン、そして鹿肉」("the good salads, and Cantelupe melons, and venison")[16] をご馳走してくれた。カルムのチェルシーの描写と併せて考えると、ミラーの日常が思い起こされるようである。彼はロンドン郊外のキッチン・ガーデンともいえるチェルシーに住んで、食用や観賞用の植物を日々相手にしながら、珍しい植物や果物と共に過ごしていた。カンタロープ・メロンは比較的育てやすいものと言われているが、イギリスでおいしく育てるには、おそらくチェルシー薬草園の温室が必要だっただろう。ミラーはその温室の二階に用意された庭師の住居に住んでいた。イギリス中の多くの庭師が、メロンを育てるのに四苦八苦しているとき、ミラーはまるで魔法のように大きなメロンを育てていたのである。

1748年、カルムが訪問した時、ミラーの名は『園芸

辞典』の成功により広く知られるようになっていた。カルムはイギリスに居る間、多くの園芸家に園芸に関する本で何が一番良いと思うかを聞いたところ、皆決まったように、ミラーの『園芸辞典』だと言った、と記している（Cf. Kalm, 111）。カルムは皆が異口同音であるのに少し驚いたのかもしれない。カルムが訪問した時、ミラーの人生は最も充実していた時だったと思われる。1730年代に結婚し、子どもが三人生まれていた。彼のパトロンともいえるスローンは、90歳近くになりほとんど耳が聞こえなくなっていたが健在であった。『園芸辞典』の改訂版の発行を続けていたミラーは、「知識の豊かなミラー氏」(“the learned Mr. Miller”) であり、チェルシー薬草園の「監督者」(“Horti Praefectus”) として言及されている（Kalm, 19）。

ミラーの出版事業と薬草園の運営を支えていたのは、彼自身の熱心な働きによるものが当然最も重要であるが、それ以外に多くの援助者ともいえる人々とのネットワーク、同業者たちとの連絡通信網、なども彼の活動を支えていた。初版の追加版で第二巻とされている、1740年に発行された『園芸辞典』を見ると、バーリントン卿への献辞が捧げられており、予約購読者として264名の名が掲載されている。スローンやバーリントン卿の名の他に、フランスの王立科学アカデミーのビュフォン（Georges-Louis Leclerc, Comte de Buffon, 1707－1788）、後にキュー植物園の設立に尽力するジョン・スチュアート、ビュート卿（John Stuart, Earl of Bute, 1713－1792）、前述のピーター・コリンソン、そして詩人のアレクサンダー・ポープ(Alexander Pope, 1688-1744)の名も見える。特徴的なのは、「庭師」(Gardener)として特定の庭の管理者と思われる人々の名が多くみられることである。ミラーの『園芸辞典』は、植物学や庭に関心のある人々のみならず、専門の職能を持った人々の間で、広く受け入れられていたとみて良いだろう。

A C A　　A C A

ments, and blunt ſpear ſhaped Leaves. This is by Father *Plumier* titled *Ricinoides Caſtaneæ folio. Cat.* 20.

The firſt Sort grows naturally in *Virginia*, and ſeveral other Parts of *North America*, from whence I have received the Seeds. This is an annual Plant, which ſeldom grows more than a Foot high, ſending out ſeveral ſide Shoots towards the Bottom. The Leaves are very like thoſe of the broad leaved *Pellitory* of the Wall, and are placed alternately, having long Foot Stalks, from the Alæ, or Wing of the Leaf; the Flowers are produced in ſmall Cluſters, the Male always being above the Female. Theſe make but a poor Appearance, and reſemble thoſe of the *Pellitory* ſo much, that at a ſmall Diſtance, any Perſon might ſuppoſe them to be the ſame, till convinced by a nearer Inſpection.

If the Seeds of this Sort are permited to ſcatter, the Plants will come up in the Spring, better than if ſown by Hand; for if they are not put into the Ground in Autumn, the Seeds rarely grow the firſt Year. All the Culture this Plant requires, is to keep it clear from Weeds, and let it remain where it was ſown, for it doth not bear removing well. It flowers in *Auguſt*, and the Seeds ripen in *October*.

The ſecond Sort is a Native of the warmeſt Countries. I received the Seeds of this from *Jamaica*, where it grows in great Plenty. This is alſo an annual Plant, which in *England* ſeldom exceeds the former Sort in its Stature. The Leaves of this Sort greatly reſemble thoſe of the annual Nettle, and ſting full as much when touched. This is too tender to thrive in the open Air in *England*; therefore the Seeds ſhould be ſown in Pots, which are to be plunged into a hot Bed, and if the Plants do not come up the firſt Year (which often happens) the Pots ſhould be put in Shelter in Winter, and the following Spring plunged again into a hot Bed, which will bring up the Plants; theſe muſt be tranſplanted into Pots, and brought forward in hot Beds, otherwiſe they will not produce Seeds in *England*.

The third Sort was found in great Plenty by Dr. *William Houſtoun*, at *La Vera Cruz*, in *America*. This is an Inhabitant of low marſhy Places, and grows about three Feet high, with an herbaceous Stalk; the Leaves are placed alternately on the Stalks, theſe differ ſo much in their Figure, as to deceive the moſt ſkilful Botaniſt, for ſome Plants will have very narrow long Leaves, others as broad as thoſe of the Cheſtnut Tree, and deeply veined, which Varieties will ariſe from the Seeds of the ſame Plant, as I have frequently obſerved.

This is an annual Plant, and muſt be raiſed in a hot Bed; when the Plants are fit to remove, they ſhould be tranſplanted each into a ſmall Pot, and plunged into a freſh hot Bed to bring them forward; they afterwards muſt be removed into a Stove, where they will flower and perfect their Seeds in *September*, and the Plants will decay ſoon after.

Theſe Plants have no Beauty to recommend them, but as they are preſerved in ſeveral Gardens, for the ſake of Variety, ſo I thought it neceſſary to inſert them here.

ACANACEOUS Plants [ſo called from Ἀκανθὰ, *Gr.* for a Thorn or Prickle] are ſuch as are of the Thiſtle Kind, having Heads, and are prickly.

ACANTHUS [Ἄκανθος, ſo called, as ſome ſay, from ἄκανθα, a Thorn, or, as others, from the Youth *Acanthus*, whom the Poets fable to have been metamorphoſed into the Flower of this Herb]. It is alſo called *Branca Urſina*, or Bear's-breech.

The *Characters* of this Plant are,

The Flower hath a double Empalement, the outer one is compoſed of three Leaves, the under being broad, concave, and deeply ſawed on the Edge; the two lateral are ſpear ſhaped, and very ſlightly ſawed towards the Top. The inner Empalement conſiſts of two Leaves, the upper one being concave, and bent over like an Arch, this is ſawed at the Top; the under is reflexed downward, ſo is convex on the upper Surface. The Flower is of one Leaf, unequal, the Beard, or lower Lip, being large, plain, and erect, this is ſlightly indented at the Extremity; the Stamina and Style occupy the Place of the upper Lip. Theſe are ſtretched out beyond the Empalement, and are alſo arched. There are two long, and two ſhorter Stamina, which cloſely coaleſce to the Style; this is ſituated upon a roundiſh Germen, which afterwards becomes an oval Capſule, having two Cells, each containing one fleſhy ſmooth oblong Seed.

This Genus of Plants is by Dr. *Linnæus* ranged in his fourteenth Claſs, intitled *Didynamia Angioſpermia*, from the Flowers having two long, and two ſhorter Stamina, and the Seeds being naked.

The *Species* are,

1. Acanthus *foliis ſinuatis inermibus ſubtus villoſis*; the common, or ſmooth Garden Bear's-breech. This is the *Acanthus Sativus vel Mollis Virgilii. C. B.*

2. Acanthus *foliis ſinuatis inermibus glabris lucidè virens*; *Portugal* Bear's-breech, with ſmooth ſinuated Leaves of a ſhining green Colour. This is the *Acanthus Luſitanicus ampliſſimo folio lucido. Juſſ.*

3. Acanthus *foliis laciniatis pinnatifidis ſpinis molliorribus*; middle Bears-breech, with deep laciniated Leaves, having ſoft Spines. This is the *Acanthus rarioribus & brevioribus aculeis munitus. Tourn.*

4. Acanthus *foliis pinnatifidis ſpinoſis. Hort. Cliff.* 326; prickly Bear's-breech. This is the *Acanthus Aculeatus. C. B. P.* 383.

5. Acanthus *foliis pinnatifidis rigidis ſpineſſimis*; eaſtern Bear's-breech, with ſtiff pinnated Leaves, ſtrongly armed with Spines. This is the *Acanthus Orientalis humiliſſimus foliis pinnatis aculeatis. Tourn. Cor.*

6. Acanthus *caule fruticoſo aculeato. Lin. Sp. Plant.* prickly Bear's-breech, with a ſhruby Stalk. This is the *Acanthus Malabaricus Agrifolii folio. Pet. Hort. Sicc.* 10.

The firſt Sort is what is uſed in Medicine, and is ſuppoſed to be the *Mollis Acanthus* of *Virgil*. The Leaves of this Plant are cut upon the Capitals of *Corinthian* Pillars.

Various have been the Diſputes among the Learned about the Plant, which is mentioned under this Title by *Virgil*, who has given ſo many different Characters to it, that no Plant yet known will agree with them all. Many, therefore, have been of Opinion, that there were two Sorts of the *Acanthus*, one of them a Tree, and the other an Herb. The Tree is ſuppoſed to be the *Egyptian Acacia*; and the Plant, the firſt Sort here mentioned; but there yet remains a Difficulty with regard to ſome of the Epithets applied to that Plant, as firſt, where it is mentioned to be an ever-green Berry bearing Plant. *Baccas ſemper frondentis Acanthi.* As to its being ever-green, that may be eaſily conceived of our *Acanthus*, in the warm Climate of *Italy*; for in *England*, where the Plants grow in a warm Situation, they are ſeldom deſtitute of Leaves more than ſix Weeks, unleſs the Winter proves very ſevere. We may alſo ſuppoſe that the fleſhy oval Seed-veſſels of this Plant might be taken for Berries. But then with regard to its being a twining Plant, *Flexi tacuiſſem vimen Acanthi.* It will by no Means agree with this, or the *Egyptian Acacia*. However, as the Botaniſts, in general, have agreed, that the Plant here mentioned is the *Acanthus* of *Virgil*, and there being ſeveral entire Columns of the *Corinthian* Order, yet remaining at *Rome*, upon whoſe Capitals the Leaves of this Plant are ſo well expreſſed, as not to admit of any Doubt of their being deſigned from our *Acanthus*; and theſe Columns being as antient as the Time of *Vitruvius*, therefore there can be no Doubt that this is the Plant from whoſe Leaves *Callimachus*, a famous Architect, compoſed the Capitals of the *Corinthian* Pillars.

The ſecond Sort was diſcovered in *Portugal*, by Dr. *Bernard de Juſſieu*, Demonſtrator of Plants in the Royal Garden at *Paris*, from whom I received the Seeds in 1725, which ſucceeded in the *Cheſſea* Garden, and frequently perfects Seeds there; which being ſown, conſtantly produce the ſame Plants as the Parent, and therefore muſt be a diſtinct Species.

The third Sort hath been long an Inhabitant in the Garden at *Cheſſea*, where it conſtantly flowers, and produces good Seeds, and theſe being ſown, do not produce any Variety; the Plants being always the ſame, the

The Gardener's Dictionary, 7th ed. (1759) “Acanthus”の項。頁は付けられていない。

『園芸辞典』は、1731に初版が出版されて以降、1768年の8版に至るまでたびたび改訂され、そのたびに新しい情報と植物が盛り込まれ、そして同時に廉価版や縮約版が様々に編集され出版された。この辞典に図や絵は付けられていない。視覚的情報がない代わりに、文字による十分な解説がつけられている。項目に上がっている木や草花を、ミラー自身がチェルシーで育てている場合はその生育の報告が書かれている。また、その場合誰から、どこから受け取った種や苗

木であるのかも記載されている。また、他の植物学者や庭師による生育について報告のあったものはそれが記載されている。庭に植える場合、見栄えがよいかそうでもないか、もしくは手間がかかるか、ほうっておいてもよいかなど、具体的な指示が書かれている。

ミラーの時代、多くの草花がイギリスに持ち込まれ、園芸品種として定着した。そうした花の一つとして、「アカンサス」(Acanthus) を例に見ていくと、時間が経つごとにこの花を育てる経験が積みあがり、また情報も多くなっているのが良く分かる。1735年の縮約版では、アカンサスの項は1ページにも満たなかったものが、1759年の版でははるかに小さい文字で2ページ近くの情報が掲載されている。そこにはまず、6つの種が紹介され、1つ目の種はヴェルギウスが "Acanthus"

"The sixth Sort grows naturally in *India*, I have also received it from the Spanish West-Indies. There is a very good Figure of this Plant in Plukenet's *Phytographia,* Tab. 261, F.4 under the following Title, Frutex Indicus Spinosus, foliis Agrisolii silqua geminate Brevi." *Gardener's Dictionary*, 7th ed. "Acanthus" The Figure from Plukenetii.

と呼んだ花であるが、これについては議論が多く、実際何であるのか、一つはエジプト原産のアカシアのことではないのか、といった意見があることが紹介されている。2番目の種はポルトガルでパリ植物園のベルナール・ド・ジュシュー(Bernard de Jussieu, 1699-1777)が見つけたものであり、その種を1725年に受け取ってチェルシーで生育させていることが記されている。この花は刈り取っても、また次の年に同じ花を咲かせるので独立した種ではないかと書かれている。三番目は長くチェルシーの薬草園で咲いているアカンサスで、この種は、毎年花を咲かせ、種をつける。四番目は葉の形が特徴的で、ぎざぎざが深く、これも親木と同じ若木が生える。5番目のものは、トゥルヌフォールがレバントで発見したもので、パリの王立植物園に送られたものである。これは地面近くに葉をつける種類で、他のものよりぐっと背丈が短い。6番目のものはインドで自生するものである。ミラーはこの種をスペイン西インド会社から受け取った。レーナード・プルークネット(Leonard Plukenet, 1642-1706) の『薬草誌』(*Phytographia*, 1691)に、この種の図版があると紹介されている。プルークネットはハンプトンコートの植物学者として知られているが、多くの植物標本を残し、それをスローンが買い取ったことでも知られる。恐らく『薬草誌』は、スローンの図書室で見ることが出来たのだろう。ミラーがスローンのコレクションからも良く学んでいることが分かる箇所である。

最初の版から、この草についての注意としては、よく繁殖して草も根も横に広がることが書かれている。4フィート以上深く根を張るので、水気の多いところでは根腐れすること、長く同じ場所で生育した場合は取り去ろうとせず、脇から生えてくる芽を摘むようにすること、根が横に生える種類のものは、一旦庭で生育してしまえば、取り去ってもどこかに根が残っており、完全に根を取りきることが出来ず、あちこちから芽を吹いて面倒なことになること、などである。ミラーの文章は、非常に読みやすく、植物の性質が手に取るように分かるように書かれている。実際に庭園作りをするものにとって、この本が非常に有用であり、必需品であるとおもわれたのもうなずける。

1759年、『園芸辞典』の7版の序文には、ミラーが何人もの人から、リンネ分類を辞典に取り入れるべきだと助言されたことが書かれている。この版から、彼は部分的にリンネ分類を採用し、『園芸辞典』に掲載した。しかし、先にも述べたようにミラーは園芸家であり、チェルシーの庭で植物を植え、種を育て、生育の様子を観察し、亜種や変種にも注意を向けて仕事をしていた。そうした人間にとって、人為的な分類学の世界よりも、土から育つ植物の様態が重要であるのは当然のことであった。たとえば熱帯から亜熱帯に生息するアジアンタム(“ADIANTHUM,” Miller, 1768)について、30種類は異なる種の標本を持っているが、それをここで一つ一つ列挙するのは、イギリスでは生育しないのであるから不必要であると述べている。また、アドニスの中の一種（“Adonis aestivalis”）について、30年以上育てているが、毎年全く決まった花、茎、葉の形状で現れるため、独立した種であると断定できると書いている（“ADONIS,” Miller, 1768）。つまり、植え続けていると形状が変化したり、色が変化したりする花も多いという事実に、ミラーは常に目を向けているのである。植物はその生の中で自らの姿を少しずつ変えていくことがある。美しい園芸品種の花は、偶然好ましい色や形が現出した際に、それを定着させようとする努力とともに生まれる。リンネの植物学は、種が普遍であることを前提としたものであった。彼は、神が意図した生物世界を、自らの階層的生物世界の体系によって表現すると考えた。目の前に生育する植物の姿に忠実であろうとするミラーの姿は、彼の『園芸辞典』のあらゆる項目から読み取ることができるが、それはリンネの持つ分類学や植物資源への視点とは違う性質のものであったといえる。

4. ジョセフ・バンクス—リンネ植物学の政治性

1771年、フィリップ・ミラーが80歳で死去したとき、ジョセフ・バンクスはジェイムス・クックと共に世界一周航海を終え、ロンドンで時の人となっていた[17]。バンクスの片腕として博物学上の仕事の中心となっていた、リンネの弟子であるダニエル・ソランダーは、常にバンクスと行動を共にするようになった。バンクスの帰還は、植物学のトレンドが転換したことを明示する出来事であった。ミラーは『園芸百科』の1768年の版で、リンネ分類学による植物分類表記を全項目に採用したが、彼の百科の記述の中では、それは単なる分類を示すだけのものという印象が強い。しかし、バンクスが著名人となり、1778年、35歳の若さで王立協会会長となっていく中で、リンネ植物学は最も信頼に足る植物学としての一般の認知を得るようになる。バンクスの傍らにはソランダーがおり、その他のリンネの弟子たちとも多くの交流があった。バンクスのリンネの弟子たちとの交流が、どれほどリンネ植物学への自身の評価に基づくものかは分からない。しかし、バンクスがいわば当然のごとくリンネ支持者を擁護することで、リンネ植物学は公平な植物学的評価以上に、まずイギリスの人々の間で、一種の権威を帯びたものとして理解されたと考えられる。彼の周りにはリンネ支持者が集合し、バンクスもイギリスでのリンネ分類による植物学を支持するとともに、フランスのリンネ派の人々を支持した[18]。その一方で、フランスの王立植物園（Jardin des Plantes）の教授であった A. L. ジュシュー（Antoine Laurent de Jussieu, 1748 -1836) との書簡のやり取りにおいては、ジュシューが自著『植物の属』(*Genera plantarum*, 1789) で展開した自然分類法による植物学にはバンクスは関心を示そうとしていない[19]。バンクスは明らかにリンネ派によって植物学の趨勢を掌握し、逆にリンネ分類を修正しようとする勢力には目に見えない圧力を加え、イギリスをリンネ植物学の中心とする活動、と見ておかしくない行動を取り続けたのである。

ここで注意したいのは、バンクスが1778年王立協会会長になった年には、リンネは71歳で死去しているということである。リンネの生前には、自身の分類学の精

度を高めるため、内容の改訂が多く行われた。しかし、バンクスが会長職である間、その分類学の内容は、新しい植物の発見や植生の研究などによる改訂が全く行われない状態であった。しかも、1782年、バンクスの片腕として博物学上の仕事の中心となっていたダニエル・ソランダーが49歳で急死した。バンクスの家でのパーティーの最中に発作で倒れ、そのまま帰らぬ人となったのである。彼はエンデヴァー号による植物探査の成果を、まとめる仕事を残したままであった。オーストラリアの植物をどのように分類するか、その課題はのちにオーストラリア植物探査に出かけ、バンクスの司書となったロバート・ブラウン(Robert Brown, 1773-1858)に受け継がれることになる。

ソランダーの後任に就いたのは、ヨナス・ドリュアンデル(Jonas Carlsson Dryander, 1748-1810) である。彼は大英博物館での仕事に加えて、キュー植物園のカタログなどの製作を行った。バンクスを中心に、リンネ植物学の牙城としてのイギリス植物学の成果が次々生み出されたわけであるが、それはリンネの死後の時期の展開であり、即ちリンネが自身の分類をそれ以上改変しえないない状況下での出来事である。実際の植物分類学上の修正は少しずつ起こっていたが、表向きリンネ植物学一色の時代が訪れ、リンネ分類学の権威は、ソランダーやドリュアンデルなどリンネの弟子たちとバンクスの強いつながりによって補強された。

リンネの死去後、リンネの息子である小リンネ（Carl Linnaeus the Younger, 1741- 1783) は、父リンネが蒐集した植物標本をイギリスで売却する運動をしたが、当初バンクス周辺では、ドリュアンデルと折り合いが悪い上に、おそらく高額を提示しため受け入れられなかった。1783年、小リンネが死んだあと、バンクスに紹介されたスミス（James Edward Smith, 1759-1828）が、遺族から1000ポンドほどで買い取り、1788年にリンネ協会を作ることになる。スミスは当然リンネ分類に忠実であり、リンネ協会の人々も、その他の植物学関係の人々も、大勢は同様であった。このような状況の中から、植物学に関連する事象として、19世紀初頭にかけて特徴的な二つの方向が現れる。一つは、リンネ植物分類を修正しようとする動きとそこに生まれる軋轢である。リンネ分類は、二名法による学術名の命名方法以外、現在ほとんど分類としては受けいれられていない。バンクスの時代の人々は、後世においては意味をなさなくなる分類法に熱狂していたことになる。しかし、当時リンネ分類を修正しようとする者がいれば、ある種の異端者として見られる事さえあった[20]。学術的真理と学術的権威との齟齬から起こる、科学上から見れば不幸な闘争の種が、当時のイギリスにはくすぶっていたといえる。イギリスの植物学に関係する人々で分類学に見識のある人々は、多かれ少なかれこの問題と向き合わざるを得なかったのである。

もう一つは、楽観的で無批判なリンネ植物学の全面的な受容による、いわば「リンネ狂い」とでも表現できる現象である。リンネ植物学に人生の活動の多くのものを賭し、リンネ分類学の破綻とともにその文化的意義が長く忘れられることになった一群の人々がその現象の主人公となる。代表的な一人が、エラズマス・ダーウィン（Erasmus Darwin, 1731-1802）である[21]。ダーウィンについては、1990年代から当時の女性文化や科学文化の文脈で、文学研究においても多く取り上げられるようになった[22]。しかしダーウィンは20世紀の末に至るまでほとんど文学者として取り上げられることはなかった。キャノンの見直し、というよりは詩と科学というテーマから、学際研究の広がる中、文学研究の手法でもアプローチしやすい、詩の形式でリンネ植物学を綴ったダーウィンの作品に脚光が当たった格好である。もう一人は、ロバート・J・ソーントン(Robert J. Thornton, 1768-1837) である。ソーントンに関しては、ほとんど文学研究で取り上げられることがないようである。最後に、『フローラの神殿』（*New Illustration of the Sexual System of Carolus von Linnaeus :and the Tem-*

ple of Flora, or Garden of Nature)[23] を世に残したソーントンについて考察したい。

5. ソーントンの『フローラの神殿』

ロバート・ジョン・ソーントン(Robert John Thornton, 1768-1837) がロンドンに生まれた時、まだ時代は18世紀のディレッタント文化の最盛期であった。彼の父は作家のボーネル・ソーントン(Bonnell Thornton, 1725-1768)であるが、父は彼が生まれる前に死んだため、直接何か影響をうけたということはないようである。彼の成長は、母シルビア（Sylvia）とその軍人の父(Colonel John Braithwaite, 1739-1803) にゆだねられた。1786年、18歳でケンブリッジ大学トリニティ・カレッジに入学、そこでは植物学教授のトマス・マーティン(Thomas Martyn, 1735-1825) にリンネ植物学を伝授されたという。マーティンは26歳で父親のジョンが就いていた植物学教授の職を継いでから60年以上その職にあったが、彼が熱心にケンブリッジで植物園を運営し、立派なものにしようと働いていたのは1770年代までのことだった。フィリップ・ミラーの息子である、チャールズ・ミラー(Charles Miller) が当時ケンブリッジの植物園の運営を任されていたが、それは数年で終わった[24]。ソーントンがマーティンの講義を受けたというのは事実と思われるが、マーティンがこの時期熱心に取り組んでいたのは、フィリップ・ミラーの『園芸辞典』の改訂版を作ることであった。リンネ分類学による植物分類を、ミラーは1768年の版には採用したが、マーティンに再度の改訂版の依頼が来たのは、より徹底した全面的な改訂をという要求であったかと思われる。1785年にマーティンはこれを出版者から1000ギニーの仕事として引き受けていた[25]。

『フローラの宮殿』の彩色挿絵の一つ。リンネの胸像の周りを、神々や花の精、天使たちが祝福の為に取り囲んでいる。
From Biodiversity Heritage Library

ケンブリッジ大学時代から10年と少しの期間、1797年に『フローラの神殿』の出版広告を出し、リンネ植物学に基づいた幻想的な花々の世界を彩色画図版によって作りだそうとするまでの間、ソーントンは科学における世の流行を追い続けた。植物学に興味を示した後は、医者を目指し、1793年にはケンブリッジ大学で医学士を修得、ラヴォアジェの化学原理を応用した血液中の酸素についての研究によるものだった[26]。フランス革命勃発後の混乱の中、ギロチンで処刑されたラヴォアジェの化学原理は、イギリスでは受容が進んでいたと考えられる。ロンドンのガイ病院（Guy's Hospital）では、外科医ヘンリー・クライン（Henry Cline, 1750-1827）や医者で鉱物学研究者でもあったウィリアム・バビントン（William Babington, 1756-1833）などの講義も聞いている。ケンブリッジを卒業後は、イギリス各地やヨーロッパを旅行し、政治学論集(*The Politician's Creed,* 8vols, 1795-9) や、医学書（*The Philosophy of Medicine, being Medical Extracts*, 4vols,

1796) の出版を行い、1797年にはロンドンで開業医として独立し、トマス・ベドーズ(Thomas Beddoes, 1760-1808) の気体学を踏襲し、笑気ガス(“laughing gas”:二酸化窒素)を利用した治療の有効性を支持していた。

傍ら、植物学関係の人脈も広げようとしていたらしく、バンクスに出した1796年頃の手紙が残っている。そこには、スコットランドのテイ湖（Loch Tay）で捕獲したライチョウ二羽とエディンバラ東部のダンバー(Dunbar)で採れたプリズム鉱石をバンクスに送ること、薬用植物センナ(Alexandrian Senna)を送ってほしいこと、というのも自分は西インド諸島でそれが育つか試してみたいからだといったことが綴られている。そして、彼自身カリブ海のヴァージン諸島にあるトルトラ島(Tortola)に行くので、バンクスの為に何か出来る仕事がないか今度訪ねて行ってお伺いしたい、ということも書いている[27]。ソーントンがヴァージン諸島まで赴いたかどうか確認するすべがないが、バンクスの用命により活動することで植物学関係のネットワークに入り込むことを考えていたのは確かだろう。

ソーントンの人生は、1797年にロンドンで医者を開業し、『フローラの神殿』の出版広告を出した時に、一つの高揚期に達していたと考えられる。その時彼にはこれからの仕事に対する大きなヴィジョンがあったはずである。『フローラの神殿』の彩色画製作には当代の有名な画家や版画家を雇い入れた。1799年からはカーティスのブロンプトン植物園の会員となった。彼は幾つかの病院で講師を務め、開業医としても収入を得ていた。彼にとって、リンネ植物学を称揚した『フローラの神殿』こそが、イギリスの植物学を世界で最も重要なものとし、そして自らの名誉も高めるものであるはずだった[28]。

『フローラの神殿』の製作は、その後順調には進まなかったが、1807年には最も大胆な彩色植物画を掲載した第三巻を出版している。ソーントンは植物につ

Strelitzia Reginae, or, Queen Plant, Thornton, *Temple of Flora*, Plate XLVIII（151） Painter, Peter Henderson, Engraved by Richard Cooper the Younger いわゆる極楽鳥花といわれる花である。葉が内側に向いているが、実際の生育状況とはことなる。緋色を内に秘め、顔を覆うように佇む女性の表象が隠されている。当時は非常に珍しがられたが、現在では一般的な園芸品種の一つである。

いての説明を書き、絵画の製作は画家に自分のアイデアを伝えて製作させていた。彼の植物の説明は植物学的に見てほとんど役に立たないものが多いが、詩歌をちりばめ、花から連想するエピソードなどを書き連ねるところは、植物学の専門化が進みつつある時代に逆行した、18世紀的なブルジョア趣味ともいえる。『フローラの神殿』は商業的に見て、そして植物学的に見ても、大いなる失敗であった。1811年、この書籍の原本や全巻を揃えたセット、その他ソーントンの出版物などを景品とした「植物学くじ」(Botanical Lottery)を行い、赤字の補てんを埋めようとしたがうまくはいかなかった。ソーントンはこの出版による負債から一生逃れることができず、ロンドンで極貧の内に死んだと伝

Nymphaea Nelumbo Sacred Egyptian Bean, Plate LX VII (191)かつてエジプトに生えていたというハスを描いている。遠景に小さくピラミッドが描きこまれている。ハスといえばインド原産というわけでもないようである。

わっている。このようにソーントンの後半生は、『フローラの神殿』の借金のために転落していくものであるが、そうした人生の生き様が、何らかの伝記研究によって語りなおされることも今のところないようである。

彼が生きている間は十分に評価されなかった『フローラの神殿』であるが、その絵画的特徴において異彩を放つものとして現在では一定の評価を得ている。それは植物学的な意味ではなく、植物画を超越したところにある美、ともいえるものによってである。『フローラの神殿』は、18世紀後半以降の植物学や科学に関する営為が消費文化の中で発達したことを良く示す事例だといえるだろう。ソーントン自身は医者であったが、人の病を治療する薬草についてではなく、薬草を描く植物画、それも消費財としての美を求める植物画に注目してリンネ植物学への献辞としようとした。彼の人生における様々な選択や行動を考えると、流行に敏感で何でも取り込もうとし、手段を問わず人の注目を集めようとする一種の幼児性さえ感じるが、そうした彼のフェティッシュな感受性が、それまで誰も作り上げなかった植物画（もしくは、植物画に夢見た何らかの世界）の視覚表現を作り上げたのだと言えるだろう。ソーントンの『フローラの神殿』は、有益なものを求め、植物を同定するための植物画の正確性を求める、伝統的な植物研究の規範を全く無視したものである。彼の仕事を、ジョン・レイ以降のイギリスの植物学の発展史の中に数えることは、神学的、科学的営為への冒涜のようにも見なしうる。しかし、植物表象の視点から見れば、ソーントンの作品は19世紀初頭のイギリスにおける植物趣味のエッセンスを一種凝縮したものとして、美しい異形のひとつと捉える事ができるだろう。

Nymphaea Coerulea, or Blue Egyptian Water-Lily, Plate LXVIII(205)　睡蓮の茎は通常このように水面より上に伸びないが、この絵においても青い睡蓮を女性の立ち姿に見立てる趣向が働いているようである。当時睡蓮をイギリスで育てるのは難しかったと考えられるため、一種の想像上の花として描かれたか。

ミラーの園芸書が、農地改革を進め、農業生産力を高めていく、緑の国、18世紀のイギリスの姿を反映しているとすれば、リンネ植物学は他国の領域から植物資源を奪取する国富的ヴィジョンに彩られて展開したと考えていいだろう。バンクスの業績がオセアニア地域の植生と切り離せないこともその一つである。ファッションとなった植物学と園芸はロマン派の詩人たちの日常生活にも入り込み、時には詩として書き残された。産業化とともに、野の花が消え、勤め人の家々の庭先での園芸が流行すると、時代は現代に近づいてくる。園芸品種が消費社会の中で加速度をつけて開発されていく中、土に寄り添って生える野の花の名を確かめる行為の尊い意味は、歴史的な回顧のなかにのみあるようである。ロマン派の詩人たちが花をうたったとすれば、その遠い先人の一人としてジョン・レイを思い出すことは悪くないだろうが、文学研究の中でレイの名が囁かれることも、殆どないだろう。出版文化の発展がはるかに進んだ現代において、どのようにばらばらになった植物に関する知の形を再現しようとするかという問題は、むしろ文学研究における問題なのだとも思えてくるのである。

（本研究は学術振興会科学研究費助成事業、基盤研究B（26284042）の助成を受けたものである）。

---

[1] Ellacombeの*The Plant-Lore and Garden-Craft of Shakespeare*は、16世紀の植物表現を知るのに有益である。たとえば、appleは、当時はあらゆる実を表す語であり、いわゆるりんごを意味する語としては、 “the Apple, the Crab, the Pippin, the Pomewater, the Apple-john, the Codling, the Caraway, the Leathercoat, and the Bitter-Sweeting”(19)があった。

[2] レイの教え子であり、財政的な援助も行っていたのは、フランシス・ウィルビー（Francis Willughby, 1635-1672）である。ウィルビーは37歳で亡くなったが、その際レイには60ポンドの年金がのこされた。ウィルビーは鳥類、魚類など多くの博物学的観察を行っており、それらの記録や研究を元に、レイはウィルビーの死後『鳥類学』（*Ornithology*, 1676）などの著作を出版している。

[3] Ray Society, Volume 148, “John Ray, *Synopsis Methodica Stripum Britannicarum*” 参照。

[4] Walters, *The Shaping of Cambridge Botany*, 12参照。

[5] Scott Mandelbrote, “Robert Morison,” *Oxford Dictionary of National Biography*. にモリソンの生涯および植物学の受容について言及がある。彼が王立協会などとの関係を持たなかったことが、学術的な孤立を招いていたと指摘されている。

[6] Guerini, “Blair, Patrick,” *Oxford Dictionary of National Biography* online 参照。

[7] 塚田「地理的記載者としてのリンネ」参照。国土の資源を有効に使う方法を考えるために、リンネは各地に調査に出かけた。塚田が取り上げている「スコーネ」地方への旅行は、王からの要請によるものであった。

[8] Koerner Lisbet, “Purposes of Linnaean Travel: A Preliminary Research Report,” in *Visions of Empire*, 117-152 に、リンネ植物学の重商主義的性格についての言及がある。リンネは利用しうる植物をスウェーデンに持って帰れば生育させることができると考えており、それが植物学研究を自国の経済的利益に還元できるという信念の元にもなっていた。ただし、実際には自生地とは気候の異なるところで育ちにくい植物は多く、こうした取り組みの多くは失敗であった。リンネとJohn Ellisとの往復書簡に多く出てくるスウェーデンにおける茶の木の栽培も、こうした失敗例の一つである。Smith (ed.). *A Selection of the Correspondence of Linnaeus,* Vol.1, 140-148参照。

[9] 例えば、Smith, *A Selection of the Correspondence of L innaeus*, Vol.1, 134-136参照。

[10] ミラーとチェルシー薬草園については、Minter, *The Apothecaries Garden* および、Le Rougetel, *The Chelsea Gardener* を参照した。

[11] Hazel Le Rougetel, “Philip Miller,” *Oxford Dictionary of National Biography* online edition参照。

[12] ミラーの肩書きは、「庭師」(Gardiner/ Gardener)であり、それ以外の正式なものはなかったようである。「園長」(Curator)と呼ぶ場合も見受けられるが、正式ではない。また、ミラーの薬剤師協会との契約期間は、最初から決められていなかった。

[13] *Philosophical Transactions*, 35(1728): 485-488, および 37(1731): 81-84 参照。

[14] Rogers, 336-337参照。

[15] "We … do approve and recommend this Book, intitled, The Gardeners and Florists DICTIONARY," Miller, *The Gardeners and Florists Dictionary*, vol2., front-page.

[16] Gorham, *Memoirs*, 234.

[17] この帰還からしばらくたった頃、バンクスはミラーの植物標本や書籍をオークションで購入している。Meynell,参照。

[18] モンペリエ大学の教授で、イギリスを訪問しその後バンクスのサークルのフランスにおける重要な人物となったのが、ピエール・マリー・オーギュスト・ブルソネ（Pierre Marie Auguste Broussonet, 1761-1807）である。

[19] ジュシューはバンクスに自然分類法が良いことを書簡で綴っている。*Banks Letters*, 482参照。ジュシューは王立協会の海外会員になることを考えていたが、バンクスが会長でいる間、会員になることはなかった。

[20] R.A. ソールズベリの事例が顕著なものである。D. E. Allen, "Salisbury, Richard Anthony," *Oxford Dictionary of National Biography*, Online edition 参照。

[21] E.ダーウィンについては、拙稿「ウィリアム・カーティスの植物園」38-41 を参照のこと。

[22] Shteir, *Cultivating Women, Cultivating Science* がこうした研究のひとつとしてあげられる。

[23] *New Illustrations* の第三巻は、彩色画がついた部分を中心に編集され『フローラの神殿』（*The Temple of Flora*）として出版された経緯があり、同時に書籍全体の出版経緯が複雑であるため、本稿ではこの書籍については『フローラの神殿』として言及する。

[24] マーティンについては、Walters, *The Shaping of Cambridge Botany*, 36-46を参照のこと。

[25] 実際にこれが完成したのは1807年である。Gorham, Memoir, 206-230参照。

[26] Martin Kemp, "Thornton, Robert John." *Oxford Dictionary of National Biography*, Online edition. 参照。

[27] *Banks Letters,* 818.

[28] 美術史家のマーティン・ケンプによる、ソーントンの『フローラの神殿』とその関連書籍について書かれた次の部分は、ソーントンの業績とその特質をもっとも十分に表現したものの一つと考えられる。 "Viewed as a whole, Thornton's publications embrace, in a single if loosely organized system, many of the varied motivations in British science at the turn of the century: a respect for experiment; a search for systems of mathematical rigour; an awe at the power of life forces, particularly those of chemical and electrical nature; a rhapsodic delight in the magic of nature in all its dramatic manifestations; a strong sense of national pride in the political and scientific achievements of Britain; a love of freedom in nature and society, as opposed to continental mores; an enthusiasm for the role of lavish, large-scale illustrations for the portrayal of truths of man and nature; and, above all, a keen awareness of the supreme power of the provident creator, designer of the 'great chain of being', at the top of which stand God's Englishmen." Kemp, "Thornton," *Oxford Dictionary of National Biography,* online edition.

＜参考文献＞

The Banks Letters. A Calendar of the Manuscript Correspondence of Sir Joseph Banks Preserved in the British Museum, the British Museum, *Natural History, and Other Collections in Great Britain*. Ed. Warren R. Dawson. London: British Library, 1958.

Bauhin, Caspar. *Pinax theatri botanici*. Basiliae Helvet., 1623.

Blair, Patrick. *Botanick Essays*. London, 1720.

Desmond, Ray. *The History of the Royal Botanic Gardens Kew*. 2nd ed. London: Kew Publishing, 2007.

Ellacombe, Henry N. *The Plant-Lore and Garden-Craft of Shakespeare*. 2nd. ed. London, 1884.

Gerard, John. *Herball, or Generall Historie of Plantes,* London, 1597.

Gorham, George Cornelius. *Memoirs of John Martyn, F.R.S., and of Thomas Martyn, B.D.. F.R.S., F.L.S., Professors of Botany in the University of Cambridge*. London, 1830.

Kalm, Pehr. *Kalm's Account of His Visit to England on His Way to America in 1748*. Trans. Joseph Lucas. London, 1892.

Le Rougetel, Hazel. *The Chelsea Gardener: Philip Miller*, 1691-1771. London: Timber Press, 1990.

Linné, Carl von. *Genera Plantarum*. 5th ed. Holmiae, 1754.

---. *Species Plantarum*. Holmiae, 1753

---. *Systema Naturae*. Lugduni Batavorum, 1735.

Martyn, Thomas (ed.). *The Gardener's and Botanist's Dictionary*. 2vols. London, 1807.

Meynell, Guy. "Books from Philip Miller's Library Later Owned by Sir Joseph Banks." *Archives of natural history*. 18(1991): 379-380.

Miller, Philip. *The Gardeners Dictionary. Containing the Methods of Cultivating and Improving the Kitchen, Fruit and Flower Garden, as also the Physick Garden, Wilderness, Conservatory and Vineyard*. Abridged ver. 2vols. London, 1735.

---. *The Second Volume of the Gardeners Dictionary: Which Completes the Work*. London, 1740.

---. *The Gardeners Dictionary*. 7th ed. London, 1759.

---. *The Gardeners Dictionary,* 8th ed. London, 1768.

---. *The Gardeners Kalendar, Directing What Works Are Necessary to Be Done Every Month, in the Gardens and in the Conservatory, etc*. London, 1732.

Miller, David Philip. et.al. (eds.) *Visions of Empire: Voyages, Botany, and Representations of Nature*. Cambridge University Press, 1996.

Minter, Sue. *The Apothecaries' Garden: A History of the Chelsea Physic Garden*. Phoenix Mill: Sutton Publishing, 2003.

Oxford Dictionary of National Biography. Online edition. Oxford: Oxford University Press, 2004-15.

Parkinson, John. *Paradisi in sole paradisus terrestris, or, A Garden of All Sorts of Pleasant Flowers*. London, 1629.

---. *Theatrum Botanicum.* London, 1640.

Philosophical Transactions.
http://rstl.royalsocietypublishing.org/

Plukenetii, Leonardi. *Phythographia*. Londini, 1691.

Ray, John. *Historia plantarum*. Londini, 1686-1704.

---. *Synopsis methodica stripium Britanicarum*. Londini, 1690.

---. *The Wisdom of God Manifested in the Works of the Creation.* London, 1691.

Rogers, John. *The Vegetable Cultivator*. London, 1839.

Shteir, Ann B. *Cultivating Women, Cultivating Science: Flora's Daughters and Botany in England 1760-1860*. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1996.

Smith, James Edward (ed.). *A Selection of the Correspondence of Linnaeus, and Other Naturalists, from the Original Manuscripts.* 2vols. London, 1821.

Thornton, Robert John. *New Illustration of the Sexual System of Carolus von Linnaeus :and the Temple of Flora, or Garden of Nature*. London, 1807. (Biodiversity Heritage Library https://www.biodiversitylibrary.org/)

Tournefort, Joseph Pitton de. *The Compleat Herbal, or, the Botanical Institutions of Mr Tournefort.* Tr. John Martyn. London, 1719.

Walters, S. M. *The Shaping of Cambridge Botany*. Cambridge: Cambridge University Press, 1981.

石倉和佳　「ウィリアム・カーティスの植物園」『ガーデン研究会ジャーナル3』2017　27-48

塚田秀雄　「地理的記載者としてのリンネ：＜スコーネ旅行＞を通して」『人文学論集』６（1988）：1-18

＜Web＞

The Ray Society HP http://www.raysociety.org.uk/
20180208